

発達を問い直す

無藤 隆

はじめに

先日の昭和女子大学における保育学会ラウンドテーブルで、「発達を問い直す」というテーマを、早稲田大学の宮崎清孝氏、帝京大学の藤崎春代氏と議論した。各々が言いたいことを言い、フロアからの発言も相まって、面白いものとなったと思う。本稿はそのときの議論を受けて、改めて現在の時点で私の考えを記したものである。

保育との関連において、発達を有効な概念とするにはどうしたらよいのかという点から考えたい。保育ということを言い出さなくても、発達というところを見直す必要はあるのだが、とりわけ保育ということでは発達における従来の考えそのままを受け入れるわけにはいかない。もっとも、従来の考えといても、発達心理学で問題にしている発達概念と（その中のバリエーションについては、無藤編『現

代発達心理学入門』ミネルヴァ書房、の序章を参照)、保育の世界で普通問題にしている発達概念とは重なりつつ異なっている。この後者の発達か何を意味しているかは、正面切った議論がないので、実はよく分からない。子どもに内在するよくなる傾向であり、年齢に応じた規則性を持ちつつ、子ども一人の独自の規則性があるとも言われるようだ(無藤による整理は、『発達と保育の間』保育講座発達心理学 ミネルヴァ書房 所収、を参照)。

保育とその感覚

保育とは何かを改めて問う必要がある。いろいろな留保条件なしにあっさり言ってしまえば、園という生活空間での子どもの活動をいかに支えるかということとしてとらえたい。園の環境の中で各々の子どもが子どもなりに様々なものや人に出会い、探索していくことが保育なのである。だから、保育の要点は、園の環境の中に何をどのように置くかという

ことと、その関わりをどのように支えるかということのはずである。

その保育の中で発達すると言えるためには、子どもの変容をとらえる必要がある。従来からある発達のテストなり、実験なりはその変容をとらえる手段である。私はその種の方法の有用性を認めるが、それがすべてではありえないと思う。生活と環境において出会うもの・人との関わりの変容は、まさにそれらのもの・人を相手にしているときにしか分からないところがあるからである。関わりとは、まさに関わりにおいてしか見ることが出来ない。

そこで必要となるのが、その場における観察である。そばに行つて、ビデオを撮つたり、メモを取つたりするのである。もちろん、子どもが気に入ったり、うまく映像に納まらなかったり、といった様々な限界がある。それでも、テストで測るよりは、関わりの度合いが多少は見えてくる。きめ細かい記述が可能になる。

だが、観察にしても、関わりの子どもにとっての意味がうまくつかめるわけではない。また、関わりが生じる文脈なり、状況なり、背景なりはビデオに映るわけではない。それらは別な形で把握するしかない。保育者の関わりの仕方も同様である。ただ、こちらは大人だから、本人がある程度は言語化できるし、後から聞き出すことも出来る。その種の才能に優れた保育者は自らの保育の関わりの様相を述べることが上手だ。

関わりを知るには、背景を含め、その関わりでの感じ方を含め、多様にとらえる必要がある。それは、結局は、その場で行うする人の感覚と、その感覚への共感でしかとらえられないのではないか。どんな資料もその行為のままになされている関わりそのものではない。子どもに関わりなど、誰にも分からないにせよ、感じとすることは出来る。保育者の感覚は本人が一番よく分かっていることには違いないが、あるところは、そばにいる人にも感じとれ

る。ただ、それが可能になるには、相当に、その場に、またその人たちに馴染みにならないと難しいだろう。しょせんは、解釈であり、経験と考察を積み上げ、解釈は動いていくが、関わりもまたそのように多層的なのかも知れない。そのような行為する人の感覚を「行為感覚」と呼びたい。

もう一方で、あらゆる行為は、そして特に保育は、その場における行為である。場としての特性を濃厚に反映しているものである。だとしたら、場の特性を、同様に把握せざるを得ないし、その把握の困難が生じる。ここでも、場に十分に馴染んでの感覚、「現場感覚」が必要とされるだろう。

それらの感覚は、その場に長い間また繰り返しながら獲得されていくものである。とはいえ、そのすべてが意識に登るものでもないし、一人の視点で見えない部分もあるが。その部分については、同種の様々な場について経験的に知っていくことが助けに

なる。実際、幼稚園のあり方は様々であり、様々でありながら共通性もある。何がよいか悪いかとはい別に、その多様性の範囲を経験することにも意味があるように思う。その場にいる際の視点も種々に取り得る。保育者の立場、特定の子どもの立場、園長の立場、部外者の立場などもあり得るだろう。行為感覚を得ることは、特定の人の特定の関わりに集中することだし、同種のことを自分がしているときのこと、誰かがしているのを見たときのことなどを思い起こしながら、感覚を分節しているような気がする。肌理の細かい記述を可能にしていくことである。おそらく、観察者の記述はそれと矛盾するようであれば、観察が一面的なのであり、当事者のあるいはその場にいる人の共感的理解が優先されるべきなのである。その理解を具体化、詳細化するような観察記録が必要とされるのである。

現場についての感覚は、もう少し漠然としたところから始まるように思う。その場に参入することか

ら、徐々に皮膚に入り込んでくるものがその場の感じ方だ。その場に三〇分程度いると、既に何か感じ方に変化がある。自分の見方に広がりが出てくる。感性の窓口が広くなるとでも言えようか。近くにありものと遠くにあるものと両方が目に入ってくる。



園の空間の中のいわばメリハリがついてくる。濃いところ、薄いところが感じられる。繰り返しその場に行くようになると、その遠近の感覚がもつとはつきりしてくる。子どもたちの顔が違って見えてくる。一人一人が際立ってくるのだ。保育者の動きも、緩やかだったり、性急だったり、気に掛けていたり、楽しんでいたりとして目に映ってくる。

それらの感覚がそのまま正しいとか、他の人が見たものと同じだとか言いたいのではない。多分、馴染みにより、「感性」により、随分と違うだろう。

それに感覚は、おそらく、自然に成立するのではなく、子どもや保育者やその他の人との会話の中で、また保育についての種々の勉強を通して、変容せざるを得ない。生の純粹の元となる感覚などを私は信じていない。だが、その感覚がどれほど「汚染」されていようと、そこから出発するしか、関わりの様相とその意味をとらえる手段はない。たとえ、主観的で片寄っていようと、とりあえずそれを述べてみるし

かない。ただ、それを他の情報により補正し、膨らませることはできる。それが、保育の何らかの記録による分析だろう。

保育が園の環境の探索の問題だとして、その探索の様相全体は結局、行為と現場の感覚からとらえるしかないのだ。その感覚が、子どもがまた保育者が保育を生きる様相だろうからだ。保育の議論で言われるあらゆる概念は、その感覚から吟味して検討していくべきなのである。

観察から保育へ

だが、感覚だけですべてが済むのではない。感覚を豊かに深くするには、感覚から離れての資料もいるというのが私の研究への立場である。また、発達と保育の結びつきが必要だとすればそうなるのである。共に、主体の持つ意味を取り上げると同時に、その意味を超えての変容を問題とするからである。また、生活全体のあり方をとらえようとするとするからで

ある。

感覚をとらえるのに、そばから見ていただけで分かるかと言えば、答は肯定・否定半々というものだろう。十分にその主体の感覚をとらえることは行為する主体以外には出来ない。だが、見ている者にとって、まったくとらえられないものでもない。行為する人間にとって、感覚を同時に意識化するのは容易ではない。思い起こすことは、常に、他の行為の感覚を重ねていくこともある。当事者であることが観察者であることと入り交じってくる。

その上に、感覚を自覚することは、感覚に違和感をもたらず行為を必要とすると思う。自覚化することとは、単にそのときのことを甦えらせることではない。感性的でありつつも、もっと総合的な考察である。そこでは具体的な違和をもたらずものとして、きめ細かい記述を可能にするものが必要だ。それが観察であり、あるいは歴史的考察だ。場にとってよく知らぬものの目の働きである。明らかに場に馴染

めばよいのではない。馴染むと同時に、突き放せねばならない。

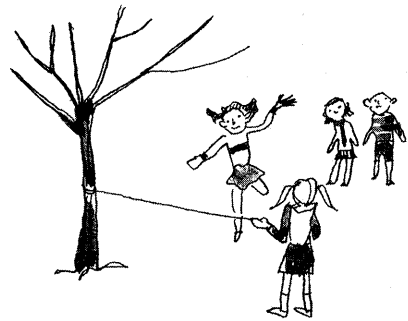
保育も発達も、まさに目に見え、実感できる関わりであり、そこでの「飛躍」として成り立つ。子どもが伸びるというある瞬間の実感が保育を支え、発達するというあり方を確信させる。だが、それが長期的に子どもを変容させるかどうかは分からない。確かなことは、いつの間にか子どもが変わっていることだ。長期的な変容を追いつめ、詳細にとらえることは、どこかで感覚から離れることだ。少なくとも、当の行為を目にする際の実感そのものではない。

発達から保育へ

発達とは、突き放しての長期的な見方からすれば、子どもものの基礎的な能力の変容である。確かに、基礎的な、例えば、記憶力や情報処理の力などが幼児期に大きく変化し、幼児の特徴的な行動のあり方を規

定している。一人一人の違いを見ることも大切だが、年齢間の明らかにある大きな違いを無視するのもおかしい。そして、そのような大きな違いは、子どもの持つ内的な基礎的能力の変化を想定する以外には説明できない。

しかし、同時に、発達のな容は子どもの関わりのある方の変貌でもある。子どもが砂場の砂を掘るのに、ただシャベルで浅く砂をかきだしていたのが、力を込めて深く穴らしい穴を掘るようになった。そこに、確かに関わりの変貌がある。おそらく基礎的な能力としての変化がそこで生じるようなことではないだろうが、変貌に違いない。そして、子どもが関わりつつ変貌する姿は、例えば、このようなものであり、特別に基礎的な能力を引き起こす体験があるのではない。この種のことの積み重ね以外にはありえない。保育者が手がかりとし、具体的に関わりようがあるのも、このレベルの変貌である。この変貌もまた発達の別の面として位置づけるべき



なのである。そうでなければ、発達という概念は保育の中に生きようがないからである。

それは言い替えば生活の中での子どもの姿をとらえるということだ。すると、生活の各々の局面での子どもの姿は、その局面のいわば構造的な特質と

セットとして分析する必要がある（拙著『幼児教育と小学校教育』岩波講座・幼児の生活と教育、第1巻 岩波書店）。例えば、食事の場面と「遊び」の場面とでは、そこに働く規制や目指される方向が異なる。置かれているものも、大人の働きかけも違う。幼児であれば、遊びでは比較的自由にさせている大人も、食事ならマナーについてとか、食べ終えるようにといった口をはさむかも知れない。同じ遊びでも、ごっこ遊びと砂遊びでは、性質が異なる。同じ砂場といっても、その広さ、砂の性質、水場との関連などで遊びが変化する。環境の特性が問題だ。

その一方で、そこでの子どもの関わりのある方を取りだし、また子どもの受け止め方をとらえる必要がある。それが既に述べたように、共感的な感覚の問題であり、感性的な把握を基礎としての分析である。

例えば、滑り台のような遊びは、砂場と違って、

遊び方が固定されており、登り方や滑り方を工夫したところで、多くの年長児の興味を引くものではないようだ。年少児には、その固定されているところがむしろ安定感があるのだろうし、一定の手順で登り滑ることがサイクルをなすのも都合がよいようだ。上下の視野の落差と、滑るという身を任せての動きとがスリルを呼ぶ。砂場の場合に、どの程度、深さがあるのか、大きなシャベルが用意してあるのかで、年長児にとっての面白さが変わる。おもちゃや人形などの持ち込みがどれほど認められ、邪魔されないかで、ごっこ遊びのようになるのかどうかが変わってくるようだ。

さらに、子どもの関わりが生活の諸局面においてどのように広がり、変貌していくかの分析をしていくことで、発達の問題となる。そのためには、先の生活の構造的なとらえ方と感性的なとらえ方を結び付け、組織的に解明していかなければならない。こ

の段階になれば、発達の分析と保育の分析のいわば結合したものとなるはずである。発達を問い直すことは、この段階に至って、初めて保育にとって実質的な意味を持つのだと思う。

おわりに

抽象的に述べすぎたように思う。私が実際に行っていることは簡単なことだ。幼稚園に行き、座り込んだり、眺めたりしているのである。その内に、視野が立体化し、身体の内側まで染み込んでくるものがある。それを頼りにしつつ、今度は細かい記述をすべく、ビデオを撮ったり、子どもや保育者にインタビューしたりするのである。場面を絞ったり、他の園と比べたり、間を置いてまた来たりするのである。そこで分かってきたと知っていることを多少論理化したのがこの議論であった。

それは、一つの園にかなり密に関わり、繰り返し出かけながら、保育者とも話し合うことが必要であ

る。それは、単に観察や客観的研究の域を超えて、保育について学び合うことと、その園の保育の在り方を変えていくことの両方を含むことになるだろう。もう一方では、様々な園の保育を見ていく必要もある。幼稚園の保育の面白さは、その多様さにあるとよく思う。その幅の広がりの可能性は相当に大きい。もちろん、その広がりを大きくすればよいのではない。何を選ぶのかは、個別の園の事情と、保育者や親の考えで決まってくることだ。ただ、保育を知るには、他の園と組織的に比較しないまでも、いわば感覚としてその広がりを感じとれることも大切だと思うのである。たとえば、一度の短い時間の見学でも、その広がりを知る上での益がある。書いたもので学ぶにしても、その核には、現場で得た何かの感覚があるべきだと思うのである。そして、その感覚を広げ、深める努力を怠るべきでないと警戒する次第である。

(お茶の水女子大学生活科学部)